

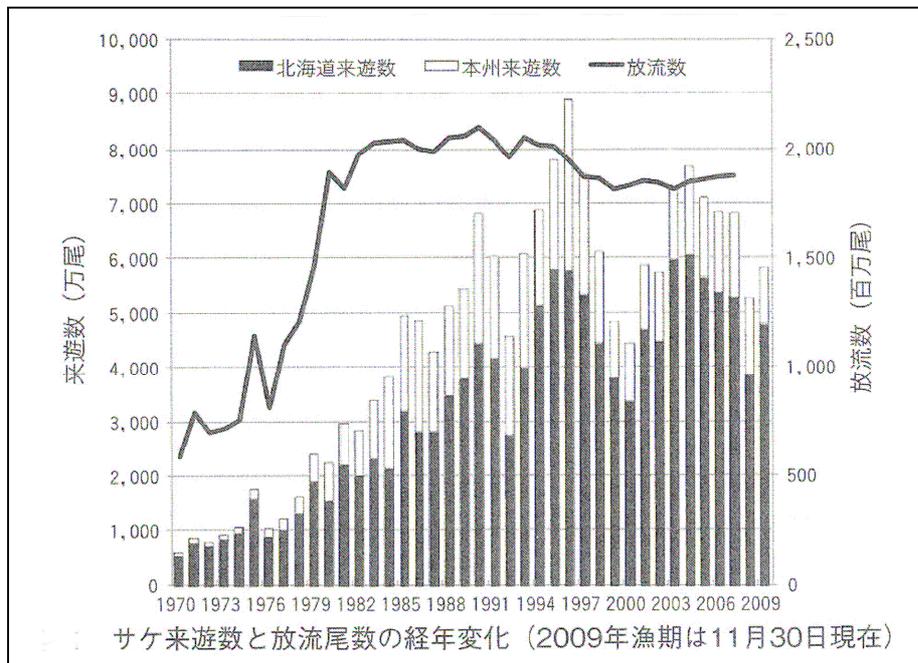
■ 日本の秋サケ資源に見られる来遊不順

日本沿岸で漁獲されるサケ資源の大半は、人工的なふ化放流事業によって生産維持されています。最近では、6千万尾から7千万尾を超える回帰尾数に達し、重量で最大37万トン（平成8年）、平年でも25万トンから30万トンになっています。ところが、平成20年漁期には、突然、平均値（平成6年以降5,297万尾）の79%にまで落ち込んでしまいました。その結果、北海道・東北の主要の漁業である定置漁業などは大きな打撃を受けました

この原因について「地球温暖化等の影響を受けての大規模な減少？」との憶測もあり大きな反響を呼びました。そこで、独立行政法人さけますセンターでは、さけます関係の試験研究機関の研究者が集まって検討しました。

○ 平成20年の特徴

北海道の来遊数も3,871万尾となり平年比の76%に落ちました。これは、4年魚が65%に落ち込んだことが強く影響し、中でも9月に来遊する前期群が地域的に大きな落ちが原因でした。本州太平洋側では、1,364万尾の来遊で平年比88%と落ち込みは比較的少なくて終わりました。しかし、本州太平洋側は平成11年以降低迷しており、岩手県の落ち込みが大きい等、資源回復に至らずまた地域的な差が出ました。一方、太平洋日本海側は、総数60万尾で平年比75%に落ちました。ここでも4年魚の減少が響きました。



○ 来遊不順の原因

この来遊数の減少の特徴として、平成16年級の回帰が落ち込んだことから、1) ふ化放流魚の量か質に問題か？、2) 降海直後の沿岸での減耗か？、3) オホーツクでの

1年目の減耗か？、4) 初回越冬期や沖合生活期の減耗か？、5) レジームシフトや温暖化の一環か？、6) その他、等が検討されました。このうち、有力と考えられたのは、2) の降海後の低水温の影響、4) の初回越冬期の高水温の影響、6) の回帰時期の千島列島周辺での高水温、でした。

○ 平成 21 年漁期の状況

このような来遊不順を検討していた 21 年の秋サケ漁期途中で、21 年は 20 年の不安を払拭するように北海道は前年比 125%に達し、前年に落ち込んだ 4 年魚が全来遊数の 59%、5 年魚は 31%（前年の 4 年魚が、5 年魚として 21 年には 1,480 万尾と平年並み）となり、ほぼ平年並みに戻ってきました。また、海水温などの海況も平年的になりサケの回帰にマイナスに影響する要因は現れませんでした。本州側も 21 年期は平年並みの回帰になっています。

○ むすび

今回の来遊不順についての検討の結果、稚魚の初回越冬期の水温変化を始めとする、沿岸域の水温変動が地域別年級別回帰率に大きく関与していることが解りました。このことから今後一層、この研究課題に取組みを強めなければならないと結んでいます。

また、今後、研究課題として国内供給のバランスの問題や野生サケと人工ふ化サケの生物多様性への問題などの課題にも取り組む必要があるとしています。（「日本の秋サケ資源に見られる来遊不順」（独）水産総合研究センターさけますセンター 永沢亨）（「ていち第 117 号」から作成）